解説

『渡邊清次郎回想録』について（前編）

元練習帆船日本丸船長
元東京商船大学教授
橋本　進

【はじめに】

平成16年（２００４）7月19日「海の日」の翌20日（旧海の記念日）午前、渡邊清氏が東京海洋大学を訪れ、氏の曾祖父渡邊清次郎氏の遺した『渡邊清次郎回想録』を寄贈された。

明治9年（１８７６）7月、奥羽御巡幸中の明治天皇は青森から御召艦明治丸に座乗され、函館を経て7月20日横浜に還幸された。このとき渡邊清次郎は明治丸に乗艦しており、その縁で、明治丸を保存している東京海洋大学に『渡邊清次郎回想録』を寄贈されたのである。

この回想録については、塩飽諸島の関係者や研究者の間でその存在は知られており、研究もなされているが一般の人にはほとんど知られていない。渡邊家からの折角の寄贈を機に、その内容を原文のまま掲載し、それに解説を加えて紹介することにした。

渡邊清次郎については「後編」で詳述するが、彼は弘化4年（１８４７）11月25日、本島・泊（とまり）浦（うら）で生まれ、昭和13年（１９３８）4月18日、東京で没した。享年92。

なおここで、「海の日」と「海の記念日」について再考しておこう。

〔海の日〕

「海の恩恵に感謝し、海洋国日本の繁栄を願う日」として、１９９５年（平成7年）に「海の日」が制定され、翌１９９６年（平成8年）から施行された日本の「国民の祝日」の一つである。制定当初は7月20日であったが、２００３年（平成15年）の祝日法改正（ハッピーマンデー制度）により7月の第3月曜日になった。

ちなみに、月曜日に移動した国民の祝日は次のとおりである。

①成人の日：1月15日（小正月であり、「元服の儀」がこの日に行われていた）
　1月の第2月曜日

②海の日：7月20日（旧海の記念日）
　7月の第3月曜日

③敬老の日：9月15日（奈良時代、元正（げんしょう）天皇が「養老の滝」に行幸された日）
　9月の第3月曜日

④体育の日：10月10日（東京オリンピックの開会式の日
　10月の第2月曜日

〔海の記念日〕

明治天皇の奥羽・北海道御巡幸は、明治9年（１９７６）6月2日に東京を出発し、7月14日陸路青森御到着、7月16日海路函館に向かわれて後、7月18日発、再び海路で横浜に還幸されるというものであった。そして、この御座乗船となったのが明治丸で、7月20日午後8時10分、横浜に帰着した。

この横浜帰着の7月20日を「海の記念日」と

することを、昭和16年（1941）5月29日の定例次官会議で報告説明、同6月5日、内閣書記官長名で各省次官に通達が出され、ここに7月20日を海の記念日とすることを正式に決定した。

当初、海の記念日は3月6日とする案があった。この日は、明治丸が英国から横浜に回航されて間もない明治8年（1875）3月5日、横須賀造船寮で日本海軍が国内で初めて建造した軍艦清輝の進水式があり、この進水式に臨御された明治天皇が翌3月6日に初めて明治丸に乗船され横浜まで座乗された日なのである。

明治天皇が初めて明治丸に座乗された3月6日を記念日とせず、7月20日とした経緯については、時の逓信大臣村田省蔵の次のような談話が、それをよく物語っている。

「…海の記念日を七月二十日としたのにはいろいろな考えがあった。第一に、記念日は冬であってはいけない。夏でなくては海に出る人間が少ないということが一つ。もう一つは学生諸君に海の思想を大いに吹き込みたい。それには学生の休みのときがよい。ということを先ず考えた…」

また、明治丸について、「海の記念日」制定の参考資料の中に次のような記述がある。

「…東北御巡幸の ノ際ニオケル御召船タリシ光栄ニ輝ク明治丸ハ世態ノ変遷ヲヨソニ超然トシテ東京高等商船学校の繋留池中ニ白色ノ船体ニシップ型ノ三檣ヲ樹テ冒シ難キ昔乍ノ品位ヲ保チ貴キ生ケル史実トシテ世界ノ大洋ニ雄飛セントスル若キ海ノ児ヲ鼓吹育成シツツアルハ周知ノ事ナルモコノ船体コソ海軍ノ三笠ニ匹敵する海ノ至宝永ク保存愛護シテ失ウコトナカラシメヨ」（カタカナは筆者）

このように、かっては「軍艦三笠」が「海軍記念日」のシンボルであったように、明治丸は「海の記念日」のシンボルであると言っても過言ではなかったのだ。

渡邊清次郎回想録

【原文】

當年とつて八拾九歳の私が、拾四五の時から船に乗り出したのであるから、想へば随分舊い話である。何しろ御維新前後のことだから珍しいことにも危険な目にも出會はした。それを一々話してゐたら到底一朝一夕に盡されることではない。

古いことではあり、記憶に間違ひがないとも限らず、本來ならば少し時日を措いて貰って本筋を辿って話したいのであるが、折角の御來訪だから今日は記憶に浮んだまゝを漫然お話しすることにする。

私の生國は讃岐で那珂郡鹽飽本嶋泊浦の生れであるが、先祖はもと〳〵天領のものであって、豊臣太閤が例の朝鮮征伐をやった當時六百五拾四人と云う人員が舟子の役を勤めたのであって私の先祖もその中の一人だった譯である。そして首尾よく朝鮮征伐の役が終つて凱旋したのが前述の鹽飽島であったのである。凱旋した日は丁度八月一日であったので、世間で五月五日の節句を尚武の節句としてお祝ひするのであるが、私の生れた此鹽飽島では八月一日を以て尚武の節句としてお祝ひする習慣になってゐる。

今日であって見れば、朝鮮征伐に海軍の艦のことを司つたのであるから、金鵄勲章だとか年金だとかを貰へるのであろうが先祖達も慾が無かつたと見え、唯永住の地として瀬戸内海の鹽飽七島を六百五十四人で貰つたのである。その人達の子々孫々が次第に繁殖したのであるが私はその七島の中の本島といふ處で生れた。

このやうな先祖の後裔であり、場所が場所であるので、鹽飽島のものは子供の時から海の仕事に慣れてゐる。舟を操ることや漁などは手に入ったものであつた。時世が段々と移り変つて生活に困つて土地を他手に渡したりしたものもあつたが海ばかりは自分の自由だ。少しの勞力さへ厭はねばどれだけでも魚がとれた。中でも鯛と鰆は有名なもので其等は鹽飽島の者が独占的地歩を得てゐたものである。

餘談になったが兎に角鹽飽島に太閤の朝鮮征

伐時代に舟子の役をつとめた子孫がゐると言うことを聴き傳へて、幕府よりの依頼があり、志望者は時の海軍に編入するといふことになった。（ひらがなは筆者、以下同じ）

【解説】

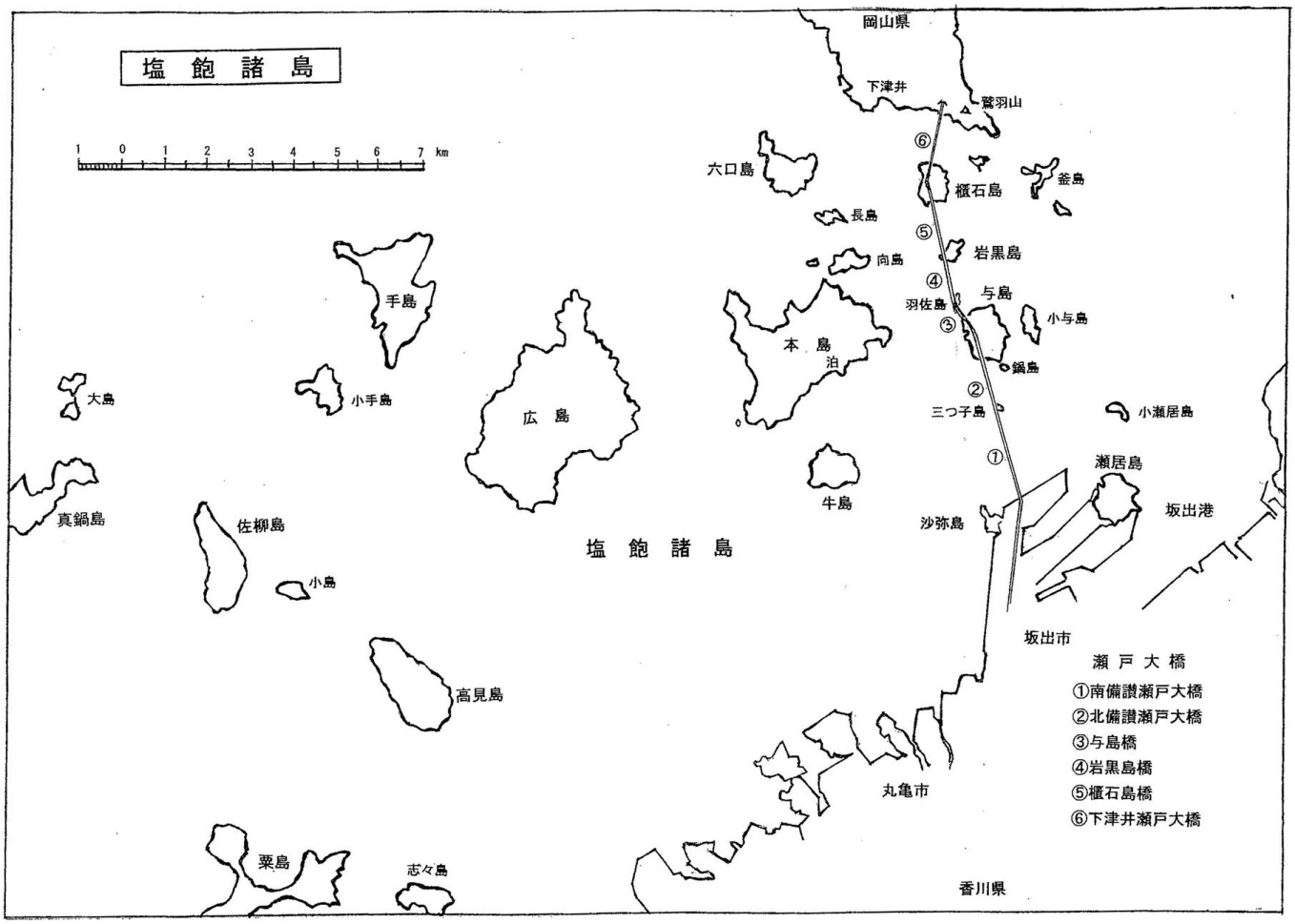
〔塩飽諸島〕：塩飽諸島は、塩飽七島（本島、牛島、与島、櫃石島、広島、手島、高見島）を中心とした島々からなっており、昔から塩焼く島、あるいは潮湧く島ともいわれたところから「しあく、しわく」の名がついたという。

塩飽諸島は瀬戸内海交通の要衝であったところから、この島々の住民達は古くは海賊、後には水軍として活躍した。

水軍として利用した織田信長は、塩飽の船方に「触れ掛り」のお墨付を与えた。これは泉州・堺港の出入りに当たり、船綱75尋（約114メートル、以下mとする）の間で、もし他国船で邪魔をするものがあれば、その船綱を切り捨ててもよいというものであった。

豊臣秀吉は塩飽のの船方達に1，250石の知行をを与え、天領として自治制を布くことを許し、信長と同じく水軍として活用した。

徳川家康は秀吉と同じく塩飽を天領とし、さらに「永代漁業権」の朱印状をも与えて優遇した。このようなこともあって、第2次世



界大戦後も塩飽漁民は、付近漁民との漁業権争いの時にはこのお墨付を漁船の帆柱の上にくくりつけて漁業権を主張したという。

一方、万延元年（1860）日米修好通商条約批准交換のため、正使新見豊前守正興の一行がアメリカ軍艦ポーハタンで渡米するに際し、サンフランシスコまでの随伴艦として選ばれた咸臨丸の乗組員（水夫・大工・等）67名のうち、35名が塩飽の出身であったことはあまりにも有名である。ちなみに、塩飽出身35名の島名と人数は本島12、広島11、高見島4、櫃石島3、牛島2、佐柳島2、瀬居島1であった。

〔本島、与島、鍋島、牛島、広島および高見島〕：本島は周回18キロメートル（以下㎞とする）の島で、泊には塩飽勤番所が置かれ塩飽諸島を統括していた。幕末になると幕府石炭貯蔵所が設けられていた。

与島の南に接するように鍋島があり、明治5年に灯台（鍋島灯台）が設置された。

牛島は徳川幕府初期から9代将軍家斉の文政の頃にかけて約230年間、廻船問屋として栄えた丸尾五左衛門が拠ったところである。丸にやの字の船印を掲げ、いろは48文字に余る船名の千石船を持って、日本全国津々浦々に勇名を馳せたという。

広島は御影石の切り出しの盛んな島である。

高見島は昔から除虫菊の栽培が盛んなところであったが、近年は過疎化に苦しんでいる。

〔小瀬居島と瀬居島〕：備讃瀬戸航路の南側、四国寄りの小さな島が小瀬居島である。その南側に瀬居島があったがいまは沙弥島、播洲とともに埋め立てられて四国の坂出と地続きになっている。

小瀬居島一帯は昔から金山鯛（色は桜色で鼻のあたまに金粉をつけたような鯛）の漁場になっていた。この近辺の海底には金脈があり、流れも強いので鯛が頭をぶっつけるたびに金粉がつくのだという言い伝えがある。

〔瀬戸大橋〕：瀬戸大橋は昭和63年（1988）に完成した本州と四国を結ぶ連絡橋で、岡山県倉敷市の鷲羽山から香川県の櫃石島、岩黒島、羽佐島、与島、三ツ子島、播洲を経て坂出に至る。

瀬戸大橋は6橋からなり、鷲羽山・櫃石島間の橋を下津井瀬戸大橋、櫃石島・岩黒島間は櫃石島橋、岩黒島・羽佐島間は岩黒島橋、羽佐島・与島間は与島橋、与島・三ツ子島間は北備讃瀬戸大橋、三ツ子島・播洲間は南備讃瀬戸大橋と呼んでいる。全長9・4㎞、南備讃瀬戸大橋が最長で1，648mある。

〔天領〕：江戸幕府直轄の領地。

〔尚武の節句〕：端午の節句。

〔舟子〕：船方、水夫。

【原文】

日本で初めて西洋型船の建造せられたのは安政元年で相州浦賀に於て三本マストを有し外面は赤く塗り舳に鳳凰の型があるので鳳凰丸と名稱した。しかし此の船を操縦するものがない爲に幕府より大阪奉行に依頼して我等の先祖の朝鮮行の例にのつとり、鳳凰丸に石川利三郎と云ふ小頭、他二拾九人がそれ〴〵浦賀に來たものである。（この石川は私の父の弟にあたるもので分家して石川姓となつた。これはこの石川本人から聞いた話である）和蘭からも後に折角船を献上して來たのであるが、それを操縦するものがないのにはハタと困つた。

幕府では長崎傳習所取締永井玄蕃頭の申立により私が生れた瀬戸内海の鹽飽島、此處の屈強青少年が幕府に召さるゝことゝなつた。私もその内の一人であつた譯である。

それから江戸時代にも歐式の軍艦を黒船と呼んでゐた。

安政二年和蘭王が外車の船を我が國に献上し、これを觀光丸と名づけた。これは日本の蒸気船の嚆矢だと云われてゐる。

これより間もなく内車の船二隻和蘭國より買上げ、これが我が國に到着する迄一隻を「日本」他の一隻を「江戸」と呼んでいたが、到着する

と同時に「咸臨」「朝陽」と改められた。
それから相次いで英國より同國王より同國王の御召艦であったものが献上され、これが蟠龍丸と名づけられた。（内車の船で三本マストを持ちフォアマストにのみ桁が二本あるもの）
咸臨丸は安政四年、朝陽丸は翌安政五年又蟠龍丸は同年に回航して來たものと記憶している。

【解説】

〔鳳凰丸〕：幕府は寛永12年（1635）6月に武家諸法度を発布し、そのなかで500石積以上の船の建造を禁止した。いわゆる「大船建造禁止令」である。
ところが嘉永6年6月3日（1853年7月8日）、アメリカ東インド洋艦隊司令長官ペリー提督は、旗艦サスケハナに搭乗し3隻の軍艦を率いて浦賀に来航した。
老中首座の阿部正弘は、黒船来航海防強化策として同年9月（1853年10月）に「大船建造禁止令」を解除し、浦賀奉行所に命じて大型航洋船の建造に着手した。この大船は嘉永6年9月19日（1853年10月22日）に起工、翌嘉永7年5月10日（1854年6月6日）に竣工し鳳凰丸と命名された。3本マストのバーク型で排水量約600トンであった。
船体の外観は漆で朱く塗装され、船首には鳳凰の胸像型の船首像、船尾にも鳳凰の尾をかたどった彫刻のある華麗な姿であった。同時期、幕府は水戸藩に命じて旭日丸を、薩摩藩には昇平丸を建造させた。

〔長崎海軍伝習所〕：安政2年（1855）、老中首座阿部正弘は長崎奉行水野忠徳の構想を受理し、幕府海軍教育のために長崎に設けた機関で、安政5年（1859）閉鎖。

〔永井玄蕃頭〕：初代長崎海軍伝習所所長。

〔外車の船〕：外車船、パドルホイール船（外輪船ともいう）。

〔内車の船〕：内車船、スクリュープロペラ船。

〔観光丸〕：オランダ国王ウィレム3世から将軍家定（13代）に献上。木造外車船、150馬力、3檣トップスルスクーナ、排水量400トン、安政2年（1855）6月長崎にて授受、原名スンビン。

〔咸臨丸〕：幕府がオランダに発注、木造内車（スクリュー）船、100馬力1基、3檣ダブルトップスルスクーナ、排水量625トン、朝陽丸と同型船、安政4年（1857）長崎に回航、原名ヤッパン（日本）。

〔朝陽丸〕：幕府がオランダに発注、木造内車（スクリュー）船、3檣ダブルトップスルスクーナ、咸臨丸と同型船、安政5年（1858）長崎に回航、原名エド（江戸）。

〔蟠龍丸〕：イギリス女王ビクトリアから幕府に献上された木造内車（スクリュー）船、126馬力1基、3檣トップスルスクーナ、排水量370トン、安政5年（1858）長崎に回航、原名エンペロル。

【原文】

そこで愈々幕府の軍艦に乗ることになると一人當り一ヶ年に金貳拾五兩と二人扶持、是は一日に玄米壹升を貰ふもので恰度今の徴兵のやうに本人はそれだけ貰へるが殘された家族の者は村から養つて貰はなければならない。その内軍艦も觀光・咸臨・朝陽・蟠龍と段々殖えて來、それに一々幕府に召されて此島から乘組員が出ることになると大變で、働き盛りの者はゐなくなり老幼の養育は村が負擔しなければならぬのであるから事容易ではなかった譯である。
さて私が愈々拾四歳の五月に幕府の軍艦に乘り組むことになった。その頃私共が江戸へ上がるには全く水杯をして別離を惜しんだものだ。今から想へば愚にもつかない話だが何しろ交通不便な時代だから是非もない。
丁度私の拾七歳の時國元から父が私を尋ねて來たが病氣を患ひ全快せぬ中に歸國を急ぎ四月中旬江戸を出発して拾五日目やうやく大阪に着いた話がある。いまなら拾貳時間以内で行けるのだと思ふと、私達が徒歩で往來した不便な時代が想ひ出されるとともに現代の何から何迄行

きとゞいた有様には全く頭が下がる次第だ。

其後私が六十一歳の時、友人の神田區末廣町の寫眞店忠勇社の主人並に池の端の料理店々主中井氏等と「キャビネカメラ」を持ち箱根舊道を徒歩で乙女峠を越へ御殿場より歸京したことがあるが、此の時も先年父と共に歸國した當時と箱根の舊道などは別に變りがなかった。その時の旅行日數は四日かゝつたと思ふ。

話はもどつて、私は子供心にも御上の艦に乗るといふ事は何となく愉快であつたので親戚や故舊とも勇んで別れを告げ蟠龍丸に乗るため出發した。

【解説】

〔貳拾五兩と二人扶持〕：平成15年（２００３）に出版された『武士の家計簿』（磯田道史）の天保14年（１８４３）７月の両替データによると、米１石は約５万円であったという。１石は10斗、４斗は60キログラム（以下kgとする）であるから１石は１５０kgとなるので、米１kgは３３３・33（＝５０，０００÷１５０）円で計算したことになる。

また当時、１両で米０・９石が買えたという記録から、１石は５５，５５５円と計算される。

平成25年２月現在の米価は１kg約３８０円であるから、米１石（１５０kg）の価格は５７，０００円となり、１両は５１，３００円（＝５７，０００÷０．９）と計算される。

以上のことから、25両は１２８万２，５００円となる。

次は扶持である。一人扶持はＩ日玄米５合の手当であるから、１か月１斗５升、１年で１石８斗となる。二人扶持は３石６斗（５４０kg）であるから、年間20万５，２００円である。

以上のことから、「貳拾五兩と二人扶持」は現在の米価から換算すると１４８万７，７００（＝１２８万２，５００＋20万５，２００）円と計算される。

〔拾四歳の五月〕：文久元年（１８６１）５月のこと。14歳になった渡邊清次郎は幕府軍艦に乗艦のため江戸に向かった。

〔キャビネカメラ〕：キャビネ版（12×16・５センチメートル）カメラのこと。

〔乙女峠〕：箱根・千石原から御殿場に抜ける乙女道路にある峠で、金時山（１，２１２ｍ）と丸岳（１，０９３ｍ）の中間にある。

【原文】

幕府の軍艦も九隻、諸船舶が三十六隻といふ風に殖へて來て、ます〳〵乗組員に不足を告げるに從ひ後には伊豆や房州邊から漁夫などの屈竟な者を志願させ採用することになつた。

其の後風帆船千秋丸を文久元年米国より買求め、私は此の千秋丸に横濱で乗り込んだ。

この船長は鈴藤勇次郎氏、此の人は江川組の人。その他荒井郁之助・甲賀源吾・力石太郎・杉島氏外數名、又鹽飽島の者は古川庄八・石川政太郎・同太助氏並に私等拾數名。

この内荒井氏は海軍で云ふ航海長、甲賀氏は次長、力石氏は運轉士と云ふところだ。後荒井氏と甲賀氏は共に函館に行き脱走した。古川氏も同様だつた。同氏は榎本釜次郎氏と共に和蘭國に留学して朝陽丸を受取り本邦へ廻航した。また石川兩氏咸臨丸で米国に行つた人である。

先年米国のペルリ水師提督が始めて我が邦に來た時に足溜りを小笠原島に求め艦隊を調へ、これより浦賀外港下浦に入港した。此の時ペルリ提督の報告により、はじめて小笠原島のあることを知つた次第である。それで文久元年十二月に咸臨丸は八丈島より移民を乗せ小笠原島へ向け出帆した、その後千秋丸も移民用家屋もの切組材、並に石炭其他の需要品を満載して同十二月出帆し、伊豆下田、志州鳥羽港などに寄港し翌年二月紀州大島迄逆航、同港で飲料水を用意して直に出帆、三月始め漸く小笠原島に到着したものである。

小笠原島には先にペルリ提督が置いて行つた

と見へ、米人數名が居り、「玉葱、馬鈴薯、鶏、豚」等が豊富であった。豚などは子牛程の大さのが居り、蝙蝠には烏くらいのものが居つた。又伊勢海老も三尺許のものをとつて持ち歸つた外、色々珍しいものを持ち歸つたものである。

此時村の名を附ける事になり、奥にある村を奥村と名け、大きな方の村を大村とし、扇形の村を扇が浦と名づけた。又當港へ入港して右側に當る村は江戸の洲崎に似てゐるので洲崎村と名付けた。

この村に假病院をたてたのだが、それについて面白い話がある。

私達の同じ乗組員の中に病人があって、戸板に乗せて洲崎村の病院に送る途中に小高き坂があつた。病人が餘り苦しさのため「南無阿彌陀佛」と申したので、此の坂をねんぶつ坂と名附けた。又次の坂にて「アイタアイタ」と云ふので此の坂を「アイタ」坂と名付けたものである。現在そう云ふ坂が有るかどうかは知らないが若し在るとしたら、之の一病人が名附けの親と云ふ譯である。

話は少々戻つて、前記の蝙蝠を江戸に持ち歸り「キワモノシ」俗に「ヤシ」に金八拾兩に賣つたことがある。これを舊有馬邸、芝區森元町中の橋の向ふにある水天宮の縁日（毎月五日）で見かけたことがある。今日は濟生会及専賣局所屬地となつている。

話變つて前記の荒井郁之助氏は回天丸の艦長として榎本氏と共に函館に行き、後海軍奉行となり東京に歸つて氣象臺に居た人。又甲賀源吾氏は荒井氏の後回天丸の艦長となり、南部宮古灣で官軍甲鐵艦と交戦し戦死をされたのである。

【解説】

〔千秋丸〕：木造・3檣バーク型帆船、263トン、1851年アメリカ・ボストンで建造、文久元年（1861）横浜で購入。原名ダニエル・ウエブスター。明治期に回春丸と改名。

〔足溜り〕：ある行動のための根拠地。

〔ペルリ水師提督〕：ペリー海軍提督、ペリー海軍司令官。

〔鈴藤勇次郎〕：文政9年前橋に生まれる。長じて伊豆韮山代官江川太郎左衛門に身を寄せ、安政2年の長崎海軍伝習所の開設に伴い、第1期生として入所した。万延元年咸臨丸訪米に際しては運用方として乗り組んだ。帰航後に描いた「咸臨丸難航図」はあまりにも有名である。維新の際には病気となり、一家を挙げて前橋に帰ったが明治元年8月榎本釜次郎等北海道に脱走するを聞き、自らこれに参加できないことを嘆いて自殺した。享年43

〔荒井郁之助〕：天保7年（1836）江戸・湯島に生まれた。嘉永2年（1849）昌平坂学問所に入学、安政2年（1855）幕府出仕（100俵10人扶持）、後に海軍操練所教授となる。文久元年（1861）12月千秋丸乗り組みを命じられた。乗組員は船將・鈴藤勇次郎、測量方・荒井郁之助、運用方・力石太郎、測量方・甲賀源吾、軍艦操練所稽古人・杉島廉之助等の面々で、小笠原島開拓のために派遣された。文久2年（1862）軍艦頭取となり、講武所取締・歩兵指図役頭取・歩兵頭並をへて、明治元年（1868）軍艦頭となる。榎本武揚とともに旧幕府海軍を率いて箱館に脱出、箱館政権（俗に蝦夷共和国）では海軍奉行に就任した。降伏後、禁固のちに開拓使に出仕し、明治12年（1879）内務省測量局長、のち中央気象台初代局長となる。明治20年（1887）新潟・三条町で日本初の皆既日食の撮影に成功。明治42年（1909）没、享年75

〔甲賀源吾〕：旧掛川藩士、安政5年（1858）幕府軍艦操練所に入り矢田堀鴻（矢田堀景蔵、旧幕臣、長崎海軍伝習所第1期生、後に幕府海軍操練所教授を経て幕府軍艦奉行となる）に師事。文久元年（1861）軍艦組出役。文久2年外国奉行水野忠徳に従い小笠原開拓に従事した。慶應3年（1867）軍艦役勤方、海軍生徒取締役となる。明治元年（1868）軍艦頭並、回天丸船將として榎

本にに従い箱館へ脱走、宮古海戦で戦死した。

〔力石太郎〕：箱館奉行支配組頭勝之助総領・箱館江戸書物用出役から長崎海軍伝習所（3期生）に学び、咸臨丸や千秋丸に乗船したが詳細は不明である。

〔杉島氏〕：軍艦操練所稽古人・杉島廉之助と思われるが詳細は不明である。

〔古川庄八〕：天保6年（1836）塩飽・瀬居島に生まれる。21歳で塩飽勤番所から御用水夫を命じられ、同年8月長崎海軍伝習所の開所とともに水主技術の伝習に参加した。

文久2年（1862）3月、幕府はオランダへ蒸気軍艦1隻の建造を注文し、同時に留学生をオランダへ派遣することにした。留学生は内田恒次郎、榎本釜次郎等9名に加えて、軍艦建造の実地諸術研究に水夫頭古川庄八等が選ばれ、総員15名となった。

慶應4年8月、戊辰の役には榎本釜次郎（武陽）に従って箱館に脱走、後に赦されて横須賀造船所に勤め製綱部門で功績を残した。明治45年（大正元年、1912）没、享年78

〔石川政太郎〕：天保4年（1834）塩飽・本島の泊り浦に父利三郎の嗣子として生まれた。利三郎は本島・泊り浦の年寄として、政太郎と共に長崎へ召出され塩飽水主を宰領していた。

渡辺清次郎は従弟である。

万延元年（1860）政太郎26歳のとき帆仕立役として咸臨丸に乗船し、その往路について『安政七年日記』として日誌にまとめた。この日誌は咸臨丸航海日記類の中で、水夫の書いた唯一のものとして高く評価されている。

慶應4年8月、榎本武陽に従って箱館に脱走、後に赦されて横須賀造船所に勤めていたが、明治18年頃海軍4等工長で退官した。同40年11月熊本で死去、享年76

〔石川太助〕：石川政太郎の弟大助、『幕末軍艦咸臨丸（上）』によれば、渡辺清次郎が筆者に同僚等の珍話を話されたとき、「（大助は）名うての乱暴者で、酒をあおり娼妓を買う。その不品行が祟り（千秋丸で）小笠原島へ着くとき、腰部に腫れ物が吹き出し歩行も困難であったが、彼は焼け火箸の真っ赤になったのを恐れもせず腫れ物へ突き通し、突然海中へ飛び込み潮水でその傷口を洗って遂に治療の功を奏した。かかる乱暴者なれば咸臨丸が難航の節など大いに役だった」と話している。

〔南無阿彌陀佛〕：阿弥陀仏に帰依することを表す語。浄土教ではこれを唱えること（称名）によって極楽へ往生できるという。

〔ねんぶつ坂〕：念仏坂、現在この地名はない。

〔アイタ〈〕：「イタイイタイ」（痛い痛い）のこと。

〔アイタ坂〕：現在この地名はない。

〔水天宮〕：福岡県久留米市に全国の水天宮の総本社がある。祭神は天御中主神（あめのみなかぬしのかみ）・安徳天皇・建礼門院（安徳天皇の母）・二位尼平時子（平清盛の妻）。舟人の守護神として尊信が篤い。ここでは東京日本橋蛎殻町にある神社。文政元年（1818）久留米藩主有馬頼徳が本社の分社として勧請したのに始まる。水神、また、安産の神として信仰されている。

【原文】

慶応二年二月、私は千秋丸を下船して築地小田原町の海軍操練所に入所したり明年回航する開陽丸に乗込む爲めに人員を募集した。

是等の者に實地練習をさせ、翌三年五月横濱に入港する開陽丸の歸國を待つた。開陽丸入港と同時に總員が乗込み和蘭より回航して來た同國人と交代した。毎日總べての練習を日課通り行ひ、港外練習も度々行つたものであつた。其の内世間が段々騒がしくなり、又慶喜公の京都御没落となり、江戸市中を警戒する爲め（酒井藩又は坂井藩か此の所記憶なし）之れらの者が巡回して居た。

然るに此頃薩摩藩士が夜中横行して面白からぬ噂あり、其の十二月二十五日、終に兩藩衝突して芝、三田の薩摩屋敷に自分で放火し、品川沖に碇泊の同藩の汽船で兵庫港へ向け出帆し

た。此の船の船長は伊東祐亨氏で後に海軍軍令部長大将元帥となられた。

これより二ヶ月も以前に開陽丸は既に兵庫に回航して居た。

此の江戸の騒動を慶喜公初め開陽丸にも通知があつた。その頃の通知の模様を一寸話して見よう。當時至急報のことを早打飛脚と云ひ、駕籠に人を乗せるには駕籠桐棒木に白木綿を通し内に居る者の體の上よりこれを巻き、本人は兩手で其の布で體を空につり、腰足の痛まぬ様に注意し、又擔ぐ人夫は四人、外に前に引く者と後より押す者で次の驛で渡したものである、この驛には豫ねて通知が來てゐるものであつて、前の驛同様直に交代して晝夜兼行、平均四日位で大阪に着く様な狀態であった。

【解説】

〔海軍操練所〕：明治2年（1869）9月、明治政府（兵部省）が近代海軍創設のため東京築地の広島藩邸跡に創設した海軍士官の養成機関。大藩5人、中藩4人、小藩3人ずつ進貢の修業生を選抜入所させ、そのほか約100人の通学生徒で同年11月に始業した。翌年11月海軍兵學寮と改称、明治9年（1876）8月には海軍兵学校と改組・改称した。

〔開陽丸〕：オランダ・ドルトレヒト市のヒップス・エン・ゾーネン造船所で建造することになり、文久3年（1863）8月起工し、慶應元年（1865）進水した。当初で艤装後、フリッシンゲンのオランダ海軍工廠でドイツのクルップ社より送られてきた最新鋭の大砲等が搭載され、慶應2年10月に完工した。幕府はこの新鋭艦を「開陽丸」と命名し、直ちに日本に回航するようオランダ政府に要請した。ディノー艦長以下109名のオランダ人乗組員と榎本釜次郎以下8名の幕府オランダ留学生を乗せて、慶應2年10月25日（1866年12月1日）フリッシンゲンを出航し慶應3年3月26日（1867年4月30日）横浜に到着した。

明治元年（1868）1月3日、戊辰の役勃発後、15代將軍徳川慶喜を乗せて江戸に帰還した。同年8月榎本艦隊の旗艦として江戸湾を脱出し箱館に入ったが、11月15日江差沖で荒天のため座礁し沈没した。

長さ72・8m、幅13・04m、排水トン数2,590トン、木造3檣ダブルトップスルスクーナ、400馬力蒸気螺旋1基、速力10ノット、搭載砲26門。

〔薩摩藩邸焼打事件〕：慶應3年（1867）12月25日、江戸の鹿児島藩邸と佐土原藩邸が幕府の命により攻撃された事件。同年10月頃から、鹿児島藩の西郷隆盛が江戸と関東撹乱を計画、浪士を同藩邸に集め、下野国出流山（現・栃木市）での挙兵を皮切りに江戸市中の撹乱を開始した。これは大政奉還後の政局に対する討幕派の政治的挑発で、幕府は鶴岡藩兵を中心とする武力によって両藩邸を攻撃した。この事件が鳥羽・伏見の戦いの発端となった。

〔伊東祐亨〕：天保14年（1843）鹿児島藩士の家に生まれる。薩英戦争などに参加し、維新後海軍に入り、多くの軍艦の副長・艦長を歴任し、海軍省第一局長兼海軍大学校長を経て、明治25年（1892）中将にに昇進し横須賀鎮守府司令長官となる。明治26年常備艦隊司令長官となり、日清戦争勃発とともに初代の連合艦隊司令長官に就任、各海戦に勝利を収める。戦後は海軍軍令部長・大将となり日露戦争にも勝利した。明治39年（1906）元帥、明治40年伯爵、大正3年（1914）没。享年72

〔駕籠〕：乗物の一つ。古くは竹、後には木でも作り、人のすわる部分の上に1本の轅（ながえ）を通し、前後から舁いて（肩にかけて）運ぶもの。身分・階級・用途などにより種類が多い。庶民が使うのは「辻駕籠」（町の辻に待っていて客を乗せる駕籠、町駕籠ともいう）や「山駕籠」（竹などで編み、垂れがなく、丸棒または丸竹を釣り手とした粗末な駕籠。山輿ともいい、道中・山路に用いられた）で

あった。

〔**駕籠桐棒木**〕：山駕籠（道中・山路に使用）の轅（担い棒）には桐の丸太を用いた。軽くて柔らかいので担ぎ人の肩および手を痛めないからだという。

【原文】

慶應四戊辰年正月元旦開陽より春日へ江戸で薩藩士の衝突のあつた次第を委しく傳へ、談判をした後遂に二日正午迄に回答する由を聞いた。然るに其の夜九時頃、ボートで榎本艦長外七名、春日の偵察に行き私はボートの「コツクスン」であつた。

春日に近づいて見れば、煙突よりは火の粉だけが出て黒煙が出て居ないので察するに薪炭で「スチイム」を作り夜逃するのだと思ひ、直ぐ本艦に歸り諸艦に通知し長鯨丸を一隻殘しただけで、他は皆港外に出た。

註　此の時春日の近傍に行き様子を見ると船中では非常な混雑をして居た。或人は、之を撃てば必ず命中し袋のネズミ同然だと云つたが、榎本氏は頑として聞かず、「陸上の人民には何の恨みもない」と申したことがあつた。依つて大阪或は堺沖を「ヒーブツー」して居る内、其の夜半頃闇に紛れて春日と他の一隻は阿波へ、外の一隻は瀬戸内海より薩摩灣に歸つたと云ふ通知は長鯨より聞き、直ぐ我開陽丸は全速力を以て其の後を追ひ阿波の國の大島沖で他の一隻と出會ひ、春日と開陽との海戦が行はれたのである。

【解説】

〔**慶應四戊辰年正月元旦**〕：慶應四戊辰（つちのえ・たつ）年正月元旦、慶應4年（1868）1月1日。

〔**春日**〕：薩摩藩軍艦、木造外車船、帆装3檣トップスルスクーナ、長さ81・0m、幅9・6m、排水量1，015トン、蒸気機関300馬力1基、原名「キャンスー」。文久3年（1863）英国カウに於いて船体、同国サフヘントに於いて機関製造。慶應3年（1867）11月、長崎に於いて授受。戊辰の役では新政府海軍に属し、阿波沖海戦、宮古海戦、箱館海戦に参加した。

〔**コクスン**〕：ボートのコックス、かじとり。

〔**長鯨丸**〕：幕府輸送艦、鉄製蒸気外車船、長さ75・8m、幅10・9m、排水量996トン、蒸気機関300馬力1基。原名ダンバートン、1864年イギリスのグラスゴーで建造された。慶應2年（1868）幕臣小野友五郎は、第2次長州征討に備えてこの艦を横浜で購入した。その長州征討のさなか、徳川14代将軍家茂が大坂城で没したのでその遺体を江戸まで運んだ。戊辰の役には榎本艦隊に属し、明治2年5月の箱館戦争終結時に新政府が捕獲した。その後、民間に払い下げられ「万里丸」と改名され、明治13年（1880）まで使用された。

〔**スチイム**〕：スティーム、蒸気

〔**ヒーブツー**〕：ちちゅう（踟躕、heave to）、船舶が帆や機関を操作しながら錨を使わずに海上のある一点に留まること。

〔**春日と開陽との海戦**〕：慶應4年1月3日夜半、摂津湾（大阪湾）を脱出した薩摩藩の春日丸・平運丸と、これを追跡した幕府海軍開陽丸が阿波国（徳島）大島沖で戦った。この海戦を俗に阿波中海戦と呼ぶ。

【原文】

此の時江戸にて諸荷物を積込んだ船が陸地へ向けて直角に航行して居た。此れを或人は其の船に罪有りと云つたが、榎本艦長は又頑張つて聞かず、春日は「ウインプル」を上げてゐると申された。此の「ウインプル」とは和蘭語で英語では「ベンデント」と云ふ。之れは軍艦の「三本マスト」の場合は「中央マスト」の上に、又「二本マスト」の時は後のマストに揚げるものである。

開陽も春日も同じ型の艦である故春日と對戦した時は、銘々の砲弾が命中し、開陽も見事に一發見舞われ、二ヶ所破損された、「ミズンマ

スト」と「フォア、ロアヤード」と少々で事なきを得た。翌三日夜天保山沖に碇泊した。岸近く米国軍艦「ガンボート」一隻、之は幕府側、外に英国軍艦一隻、これは官軍側なのである。此艦は英国と佛國との「セバストボール」の海戦で彼の有名な「ネルソン」提督の乗つた軍艦と似寄艦で船體は非常に高くて大砲も三段に備り、砲の數も四十門程有るのだが後ろにある上下の分は皆木砲で飾り砲である。今から思へば全く面白い話だ。此の速力は一時間に八「ノット」位のもの。

注　ネルソンの乗つていた船は風帆型で戦闘の場合には「スチームボート」で左右に驅け廻ると云ふ事を聞いたことがある。

此艦は「フレゲット」型で其軍艦を見た者は現在の海員中には私の外數多くないと思ふ。

【解説】

〔ペンデント〕：一般に長い旗の総称である。「pennant」の正式綴りは「pendant」だがペナントと発音する。ペナントは信号・装飾・各種ランク表示に用いられる。英海軍の軍艦は商船と区別するため、メインマストに掲げた非常に長く幅の狭い長旗。ここでは、春日がペナントを掲げた薩摩藩の軍艦であることを云ったものであろう。

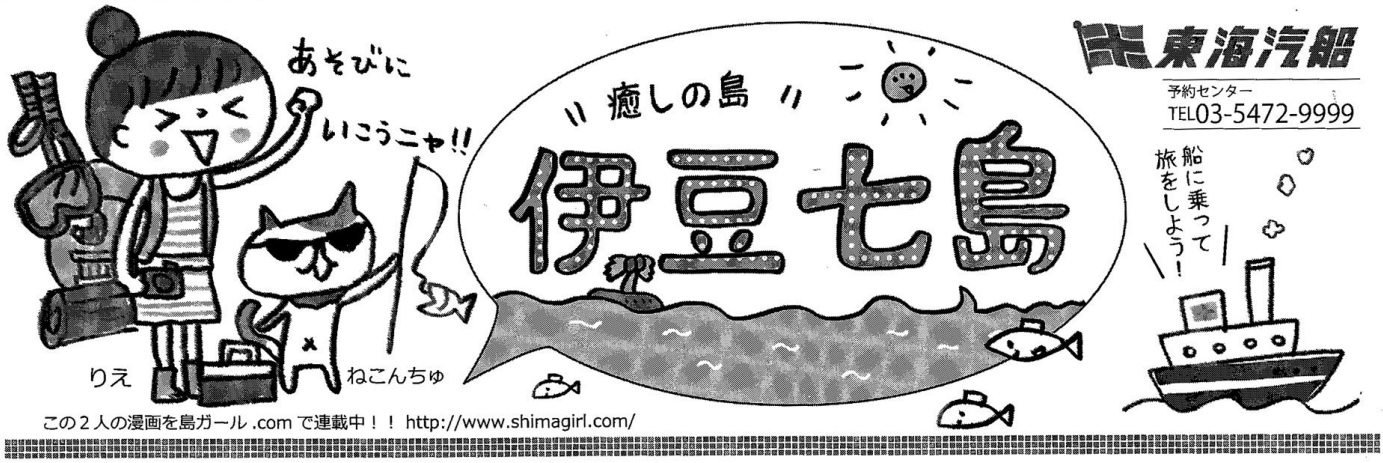
〔天保山〕：大坂を流れる安治川の洪水防止と大坂への大型船の入港を容易にすることを目的に、天保2年（1831）から2年間「天保の大川浚」と呼ばれる浚渫工事が行われた。浚えられた土砂は川口の左岸に積み上げられ築山となり川口の目印となった。そのため、当初は「目印山」と名づけられたが、のちに築かれた時の元号から「天保山」と称されるようになった。

目印山の高さは当初は約10間（18・18m）ほどの高さがあったが、時代の変遷によって現在の標高は4・53mで、日本一低い山として知られ、山頂には「二等三角点」が設置されている。

その隣に慶應4年3月26日（1868年4月18日）明治天皇が新政府の軍艦を観艦のため、この地に行幸されたことを記念した「明治天皇行幸記念碑」が立っている。参加した新政府の軍艦は電流丸（佐賀）・万里丸（熊本）・千歳丸（久留米）三邦丸（鹿児島）・華陽丸（山口）・万年丸（広島）の6隻（合計2,452トン）で他にフランス軍艦1隻が参加した。

〔フレゲット〕艦：フリゲート艦、1750～1850ごろ上下2層の甲板に28門～60門の大砲を備えた大型木造帆船で、今日の巡洋艦に相当したもの。

〔注〕：この項は風聞の域を出ない。　（つづく）



ISSN 0286-8474

旅客船

NO.260

一般社団法人 日本旅客船協会

(Japan Passengerboat Association)

編集後記

○日本旅客船協会は、4月1日に「社団法人」から「一般社団法人」へ移行した。今後は、新定款に沿って総会、理事会を運営することになる。移行後の最初の理事会、総会が今年の6月22日に開催される会議となる。役員改選期でもあり、理事会、総会、そして新理事による代表理事選定の理事会等と非常に時間にタイトな運びになる。また、協会の運営についても3月の理事会で見直しが行われた。正副会長、地区協会長からなる政策部会、企画部会を改組した観光部会等が新設された。協会活動の活発化、迅速化をよりいっそう図るための見直しである。また、年中行事ではあるが5月から6月にかけ各地区旅客船協会の総会が開催される。各地区の協会も、とにもかくにも総会が終わるまでは、落ち着かない。

○今回、吉田公一氏には特別寄稿として「クヌッセン機関長の遺徳顕彰」の紹介をお願いした。昭和32年2月、和歌山沖で炎上した「高砂丸」乗組員を救出すべく自分の命も顧みず救助にあたったクヌッセン機関長。その功績を皆さんに広く知っていただきたく、執筆頂いた。是非ご一読願いたい。

○池田良穂氏は、瀬戸内海でのクルーズビジネスモデル（パート2）として、昨年3月の四国運輸局が企画したレストラン船「銀河」によるクルーズ、本年3月、中国運輸局が企画した高速船「はやしお」によるクルーズを紹介している。海洋国家でありながら、国民全体になかなか浸透できていないクルーズ。我が業界にとっても永遠の課題であろうか。

○今回、齊本進氏は、「渡邊清次郎回想録について（前編）」で、明治9年明治天皇が明治丸で青森、函館と経て、7月20日に横浜に還幸された。このとき明治丸に乗艦していたのが渡邊清次郎氏である。我々海事関係に従事するものとして「海の日」の由来について、再考する意味でも是非一読願いたい。

○野間恒氏は、三姉妹物語＝タイタイニック事件百周年を迎えて（上）で、「姉妹船を3隻造ると1隻は欠ける」という昔からのジンクスに基づいた切り口から豪華客船タイタニックの事故について記述した。ちょっと変わった切り口から描いており続きはどうなるのか興味わくわくする。早く、次号が読みたい。

○渡辺輝夫氏は、世界の海と港からその（16）で、今回はボルネオ島のブルネイに向けて船を進め、ブルネイを紹介している。自分の足で行き、見て、そしてその国のいろんな方々と会った体験を書いている。ブルネイを知る上での教科書である。

○西口公章氏の「生活航路のいまむかし」で、今回は長崎市の北部、海辺から深く内陸に入ったところに船にちなんだ地名、「船石」、「双船方」があるのを見つけた。氏は現地を訪れ、この地名由来を探ることとしたのである。全国各地で「船」がついた地名はいったいどのくらいあるのだろうか。

○6月22日に開催される総会、理事会準備に追われている最中の編集後記である。協会事務室内の若干の配置換えの準備もあり、その他にあれもこれもやらなければならない。どこから手をつけたらいいか、本当にバタバタ状態である。こういう時こそ落ち着いて、物事に当たらないと大きな間違いを起こしやすい・・・・一呼吸、一呼吸。

募集

――原稿――

▽船旅の楽しみ、船旅へのアドバイス等をテーマとする旅客船利用者向けの原稿を募集します。

字数は2000字程度。次号原稿締切は平成24年7月10日、宛先は下記協会内、「旅客船」編集室。

本誌の配布先は

①会員及び賛助会員
②関係官庁及び関係団体
③主要都市図書館

本号掲載広告

（表紙）…九州郵船株式会社
（表紙裏）…ニュージャパンマリン㈱、東京海上日動火災保険㈱、㈱損害保険ジャパン
（扉）…日本定航保全㈱
（記事中）…あいおいニッセイ同和損害保険㈱、東海汽船㈱、三井住友海上火災保険㈱、日本興亜損害保険㈱、

禁無断転載

機関誌 旅客船 第260号
平成24年5月発行
発行所 一般社団法人 日本旅客船協会
〒102―0093
東京都千代田区平河町2―6―4
（海運ビル9階）
TEL 3265―9681（代）
FAX 3265―9684
URL http://www.jships.or.jp
印刷所 船舶印刷株式会社

解説

『渡邊清次郎回想録』について（後編）

元練習帆船日本丸船長
元東京商船大学教授
橋本　進

【前編のあらすじ】

幕府天領の塩飽諸島・本島泊浦で生まれた渡邊清次郎は文久元年（1861）5月、14歳のとき幕府軍艦に乗るため江戸に向かい横浜で千秋丸に乗船した。千秋丸では小笠原島に航海、慶應2年（1866）2月に下船して海軍操練所に入所した。翌慶應3年5月、和蘭より回航の開陽丸に乗り組んだ。同年10月には兵庫に向かい薩摩藩春日丸と阿波沖で戦った。

【原文】

明治元戊辰年正月七日午前四時頃米国の「ガンボート」より「ボート」が一隻開陽丸に來た。其の船には外国奉行山口駿河守が乗込んで居られ、軍艦奉行か又は軍艦頭即艦長に面會がしたいと申されたので、副長澤太郎左衛門甲板に出て來て其の用向を尋ねられました。すると高貴の御方はじめ八名の方々が米艦に居られるから、早く此の船におつれ申上ぐる様にとの事であった。で副長は直ちに仕度をなし「ボート」三隻と儀仗兵を用意し、自身御迎へに行かれ御同道して歸艦されたのであつた。其の時千石積とも覺はしき日本商船一隻が開陽丸に横付けされて居ました。此は御側用人室賀伊豫守と奥向の女中の方々が乗つて來たのでした。

それから上様の御希望であるから直ぐ船を江戸に向けて出す様にとの事が有りましたが假令将軍が乗込まれても船將が不在でありますから勝手に船を動かすと云ふ事は出來ませんと云ふ事で御斷り致した様です。それに何か艦將、副長の間に打合せがありましたので、艦將の歸艦まで猶豫を願ふと申上げたのですが御聞入ありませんでしたが。そこで澤副長に江戸へ航海中、船將代理を申し付けるとの命令が下りました。それでも出來ませんとは申されませんから、是非なく出帆の用意に取掛りまして蒸氣をあげました。其の時英国の軍艦が戦争準備の形にて、開陽丸の近くに錨を入れ、程なく錨を揚げて、動き始めました。そして開陽の附近を二三回めぐり、頻りに操練を始めました。全くの示威運動であつた。開陽丸はそんな事は平氣でした。丁度其の時かと存じますが上様よりの御沙汰で本艦の戦争操練を爲すべしとの命令が下りました。副長の命令にて直ちに夫々受持ちの位置に付きました。

そして僅か二分間にて準備が整ひ操練を始めました頃、將軍慶喜公會津桑名の兩候其他老中方にも目もはなさず見分されました。將軍より操練は如何にも能く揃ひ、又迅速なるには大に満足であつたとの御沙汰がありました。

開陽丸はそのまゝ進行しまして正月八日大阪灣を出で、紀州沖を通過し、其の南の端潮の岬より、大島沖を五六海里も過ぎたる時、西北の風、俗に尾張の吹出と云ふ大風に逢ひました。

ところが段々風ははげしくなつて參りまして、蒸氣を強めましても船體が動搖するので船は仲々進みません。止むを得ず蒸氣力を止めて帆前斗りとしました。すると一時間に十六海里位の速力が出て盛んに走ります。十日の午前四時頃には八丈島の北五六海里の所にまゐりますと、全く風はなぎました。夫れより方向を相模灘にとりましたから午後の六時四十分頃洲の崎をかはして浦賀港に無事投錨致しました。（浦賀に入港したのは、何か特別の御用があつたのだそうでした）

此の時上様より貳分金で金貳百兩を澤船將代理に賜はつて、水夫頭古川庄八以下に格別骨折の褒美として下さつたのであります。翌十一日明け方浦賀を出帆しまして、午後七時少々過品川沖に着き直ちに錨を入れました。

上様にはすぐ開陽丸の「ボート」にて板倉伊賀守のお供にて御濱御殿へ上陸になった。會津桑名兩侯を始め其の他の方々は、漁船を雇つて開陽丸を下り上陸されました。

【解説】

〔ガンボート〕：砲艦

〔儀仗兵〕：儀礼・警備のための兵隊

〔御側用人〕：御側衆（将軍の次室に宿直し、老中に代わって夜間の諸務を決済・上達する）を監督し、将軍の命令を老中に伝え、老中・若年寄の上申を将軍に取り次ぎ、評定所にも列する譜代大名。格式は老中に準じ、その権勢は老中を凌いだ。

〔奥向の女中〕：居間・台所の仕事に携わる女中。

〔貳分金〕：1両の2分の1、2枚で小判1枚

〔御濱御殿〕：承応3年（1654）徳川綱重が別邸を営み、その子綱豊が6代将軍家宣となったとき、その別邸は浜御殿と呼ばれ、将軍家唯一の別邸となる。現在の浜離宮庭園である。

【原文】

艦將榎本和泉守は、大阪表より攝津に歸つて天保山に上り海上を見たところ風は強く波は高くして尋常の船は通ふ事が出來ない有様です。望遠鏡で開陽丸の全く江戸表へ向けて進行したのを知つて、上様にも御無事に出帆されたと大に安堵して山を下り、伏見鳥羽の景況を視察し負傷者は之を軍艦に送る手配をなし、又は陸軍兵士の來るのを種々助け、彼是心配をされ、十二日の朝漸く富士山艦に歸艦せられ、望月艦長より開陽丸出帆の模様を聞取り、其他の各艦と共に其日出帆して、十四日午後品川沖に投錨したのであります。

榎本艦將は其日すぐ開陽丸に乗込まれました。將軍家江戸城に歸られましたが市中にいろいろの取沙汰起り、段々騒がしくなつて來たので、各艦よりの上陸もみなお濱御殿へのみ來り、丁度海軍根拠地の様でありました。用心の爲め各艦より番兵を交代に上陸させ此の處を守らせました。石炭を始め必要な物品は茲に貯蔵し夫々へ渡す事になつた。一時は重だちたる方々の中には家族を御殿内にある長屋へ住はせた向きも有りました。

市内には色々の出來事が起つて商家などは非常にビクビクする様になりました。

慶喜公が將軍の職を返上になったと云ふので市中は大變な騒ぎとなりまして、官軍は追々入込み來り、一寸無政府の形となつてしまつたのです。

浪人者や又は不正な組々をこしらへて金の有りそうな商店に日中大威張で入り込み、軍用金を出せの何だのと談判をなし、若し斷らうものなら「ダンビラ」を抜いて斬殺すとおどかすので、どこでも何程かを出してあやまると云う有様だ。之を押込みと稱へ體の良い強盗でした。

慶喜公の將軍職返上には、いづれも大不平で遂に上野の宮様を御守護申上げ、官軍を打ち佛ふと云ふ目的で、彰義隊と稱へて幕臣が次第に上野の山へ集つて來ました。そこで頻りに示威運動をなす様になりました。

其後結果は市内に於て官軍との些細の行違ひからあちらこちらに切合が起つたのです。官軍は肩に金切を付けて居ますから、直ぐ判ります。

そこで右の騒動が始まつたのです。錢湯だとか、すれ違ひにどこがあたつたとか誠につまらない事が原因です。官軍の方でも餘り亂暴なのでとうとう我慢が出來なくなり、五月十五日總攻撃に着手したのでしたが夕刻には彰義隊は大敗軍となりチリチリバラバラ奥州の方へ敗走しました。

【解説】

【ダンビラ】：段平とも、刀のこと。

〔将軍職返上〕：将軍職は、慶長8年（1603）徳川家康が征夷大将軍に任じられ、慶應3年（1867）15代将軍徳川慶喜が大政を奉還（将軍職返上）するまで265年続いた。

〔金切〕：錦切れ、にしきの切れはし、（肩に付けて目印としたからいう）明治維新当時の官軍兵士の稱。

〔錢湯〕：料金を取って入浴させる公衆浴場。

〔彰義隊〕：慶應4年（1868）2月23日、徳川慶喜側近の渋沢喜作を頭取、天野八郎を副頭取として、慶喜の護衛と江戸市中の警衛を名目に結成され、旧幕臣を中心に牢人も加わり隊員は3千人にのぼった。5月15日大村益次郎の新政府軍の一斉攻撃を受けて壊滅した。

【原文】

私は仝月十七日上陸し、商人に變裝して、上野の山門の處まで行つた。精養軒のあたりの山内と、今の世界料理店のあたりは一面大溝で、この溝の中ばかりでも死人が九名も居り、又山内には親子らしい者が切腹して居るのを見た。種々の死体を見たが、其員を數へて見たら其處ばかりでも八十三名だつたと記憶してゐる。

この後海上へも陸と同じく朝令が降り、慶應三年に、岩田平作氏が米国より回航してきた處の原名「ストーンウオルジヤクソン」甲鐵艦並に富士山、朝陽の兩艦が朝廷に返納され開陽丸、回天丸、蟠龍丸、千代田形の諸艦は返納されなかつた。

註　この千代田形艦は我が邦では始めて建造されたもので外国人の手は全く借りなかつたものである。此の時の主任として肥田濱五郎と云ふ人があつた。この人は江川組の人で後には函館に行かずに横須賀造船所長となられた。

此の千代田形を造るにあたり、船體建造の方法を司つた人は鈴木長吉と云ひ伊豆國河津の人である。この鈴木氏並に遠く開陽丸を注文に行つた上田寅吉氏の兩人は當時西洋型造船方法を研究した人である。

明治元年戊辰八月十九日我々は品川灣を後にして函館に向かつた。開陽丸は美加保丸を回天丸は咸臨丸を長鯨丸は千代田型を曳き、その外「蟠龍」「神速」を加へ八隻で品川を出帆した。

註　咸臨丸は先年米国或は小笠原島等へ行き大功績を現した船であつたが、時世には勝てず老船となつたもので「エンジン」お取除風帆船として引かれて行つたものである。前述の石川政太郎氏はこの咸臨丸の盛なりし時米国へ行つて來たことがある。

丁度此の頃二百十日に近く時化時であつて十九日の夜から北東の暴風雨となり、遂に曳船としていた美加保丸との曳縄も切れ「マスト」も折れ、又開陽の舵も折れて航行自由ならず、浪間に漂ふこと四日間漸く風も凪ぎたので兩舷側にある「パックスヒール」英語では「スイギングブーム」をつきだし、其の先に縄で大きな空樽をしばり付けこれで船の左右を加減して、仙臺の東名灣まで辿り着いた。

【解説】

〔精養軒あたり〕：上野精養軒は明治9年（1876）に現在の上野山中に開業した。後刻、上野戦争を想起しての記述であろう。

〔ストーンウオルジヤクソン〕：木製・装甲、双内車（ツイン・スクリュー）船1200馬力、2檣ブリッグ、排水量1358トン。1864年（元治元年）アメリカ南北戦争中、南軍がフランスに注文し、ボルド市で建造された。1867年（慶應3年）徳川幕府はこれを買収し、同年5月横浜に回航したが、アメリカが局外中立を宣言して引き渡しを拒んだ。奥羽平定後の明治4年12月、新政府が買

収し東艦と改称した。

〔千代田形〕：木造内車（スクリュー）船、60馬力1基、2檣トップスルスクーナ、排水量138トン。文久2年（1862）5月江戸石川島において建造に着手、慶應2年（1866）5月完成、起工から竣工まで5年を要した。徳川幕府建造最後の軍艦、すべて日本製である。

〔美加保丸〕：木造3檣バーク、800トン。原名ブランデンボルグ、1865年（慶應元年）プロシアで建造され、長崎で購入した。榎本艦隊に属し蝦夷地に向かう途中、触礁破壊した。

〔回天丸〕：木造外車船400馬力、3檣トップスルスクーナ、排水量1678トン。原名イーグル、1855年（安政2年）プロシアのダンジックで建造され、慶應2年（1866）長崎でアメリカ人ウォーリスより購入。榎本艦隊に属し箱館海戦の折、東艦の弾丸が命中して機関を損傷、因って浅瀬に乗り上げ乗員は艦を去った。新政府軍はこれを焼いた。

〔長鯨丸〕：鉄製外車汽船、300馬力、996トン。原名ダンバートン（ドムバルトン）1864年(元治元年)イギリスのグラスゴーで製造、慶應2年（1866年）横浜で購入。旧幕府艦隊に属し蝦夷地に向かい函館戦争に参加したが、明治2年5月新政府に拿捕された。

〔二百十日〕：立春から数えて210日目。9月1日ころ。台風襲来の時期に当たる。

〔スイギングブーム〕：スィンギングブーム（繋船桁 swinging boom）のことで、錨泊中両舷側から真横に出す長い円材で、ボートなどを繋ぐもの。航海中は舷側に沿って納められる。開陽丸は舵を損傷し、応急操舵のため両舷に繋船桁を張り出し、櫓を使ったというのである。

【原文】

そこで新しい舵を造りたいと思ひ仙臺藩の神木の欅の一枚板で造らうと苦心したのだが、とうとう出來上らない内に先を急いだため、箱の中に鐵の「バラスト」を入れたもので假の舵を造り、漸く北海道の鷲木村まで行くことが出來たのである。

註　此處は室蘭の先で丁度函館の裏側の處である。

回天と蟠龍は既に函館に着いて居り、開陽の目的地も函館なのであるが、何しろ不完全な舵で航行するのであるから思ふやうに船を操縦することは迚も困難であつた。それから直ぐ其の日に函館に着き、舵を本船に取り附けるには艫を陸にあげなければ出來ぬ故直ぐ又其儘出帆にて江差に廻り沖より松前城を攻撃して落城させ江差へ入港した。榎本、澤の正副艦長も上陸したが私は船に残つた。

此の邊の舊の十一月頃はとても風波が荒く、殊に此港内の錨場所は底が岩で錨が落着かないのが常で不安心なのだが、折よく南風が吹いてゐて荒れる様子もなかつたので、皆が安心して上陸したものであつた。然し此の頃の南風はすぐ北西風に變るところで、風が出る前に浪が高くなり、丁度此の時もその狀態で歸船するのに困つたものであつた。その時は出帆しやうと思つても大事な「スチーム」は三十六、七ポンド位より出來て居らず、全く致し方がなかつた。又追々大風大波が寄せて來て益々激しくなるばかりであつたが、それでも無理をして出帆した。「スチーム」は不足なれ共錨を揚げた。大浪のために船が横になる頃は「スチーム」が充分出來たが、今度は船體が眞中から折れて終ひ、漸くそれから三日目に海陸相通ずることが出來た。考へて見ると全く惜しいことをしたものである。今思ふと大變な失策をやつたもので、全く恐縮してゐるしだいである。

【解説】

〔バラスト〕：舵に似た箱の中に浮沈のバランスを取るために入れた鉄の錘をいう。この箱を假舵として航海した。

【原文】

室蘭へ第二回天丸（アシユロット）に乗組出張されたる役々人名左の如し。

開拓奉行　澤　太郎左衛門
同支配組頭　樋野惠太郎　雜賀孫六郎
同　調役並　松野勇次郎　關規矩守
同　定　役　佐藤鹿之助　瀧本清次
　　新井所右衛門
同　書記役　舟橋力太郎　片岡初太郎
同　同　心　石井千太郎　木下大三郎
　　下里辰之助　野村彌太郎
　　田村政太郎　山片安太郎
開拓頭並　根津勢吉（後回天乗組となる）
同　頭取　上原七郎　木村宗藏
開拓　方　鈴木清三郎
同　並　上田寅吉　大澤久平
　　田所平左衛門　近藤庫三郎
　　乙骨兼三　小林彌三郎
　　榎本玄郷　小花萬次
　　松平艮之丞　喰代定次郎
　　稲生英三郎　宇佐実重松
　　野村金一　飯田豐之助
同　見習　能勢甚三郎　島田鏘之助
開拓方小人取締　山中九八郎　渡邊清次郎
　　山田清左衛門
同　小人　六十參人
（是は開陽丸乗組の水夫なり）

其　他

【解説】

〔第二回天丸（アシユロット）〕：木造内車（スクリュー）船、3檣シップ、原名「アジロット」。秋田藩の軍艦「高雄」、明治元年（1868）10月28日、箱館において捕獲し第二回天丸と呼んだ。後、宮古沖で新政府軍の軍艦に追われ、宮古北方の羅賀浜に乗り上げ、自焼して南部藩に降伏。フランス人を含む乗組員（71名とも95名とも）は東京に護送された。

〔渡邊清次郎〕：開拓方小人取締として第二回天丸（高雄丸）に乗船し室蘭に向かう。小人とは小者（身分の低い使用人）のこと。

【原文】

それより乗組員の内、後片附のため少しだけを残してあと全部五稜郭にに引き揚げて終ひ、私は副艦長の澤太郎左衛門氏が開拓奉行となられたので小人取締役となり、百二十名を連れて室蘭港へ行き南部陣屋を改良して砲臺を造り、これが出來上つたので澤氏の書狀を持ち馬で「アイヌ」を案内人にして函館へ行つたのである。

この頃の陣屋には味噌は仙臺から澤山積み込んで來たので不自由しなかつた、醤油は少しもなく仕方がないので味噌を水煮して上汁を取り醤油代りに使つたものだ。

私は少々北海道辨が出來て重寶だつたので醤油其の他のものを買ふために金貳百兩を持ち、又澤氏より榎本氏への書狀を持ち函館へ行くことになつた。

使者となつて出發し大野峠まで來ると、昨夜まで戰爭をしてゐた樣子だ。此處まで來ると案内人の「アイヌ」が急に「旦那私はもう行くのが嫌になつた」と云ひ出してとうとう其處で馬からおろされて終つた。

仕方がないので赤毛布を着て金子は胴巻に入れ「ピストル」を用意して一見旅商人風にみせかけ徒歩で道を急いだ。

註　赤毛布を手拭で首に巻きつけ、丁度「インバネス」のやうな格好が當時其處で流行だつた。

途中村の役人と人夫に逢ひ「お前は脱走人ではないか」と聞かれたので、決して左樣なものではなく幌泉へ昆布の買ひ出しに行つたのであると押問答している内に持つてゐた「ピストル」を發見され、貳百兩の金子と「ピストル」は奪られて終つた。

それでも榎本氏への書狀は奪られなかつたので不幸中の幸ひと思ひ、又道を急いだのだが暫く行くと二股道へ出た。さ、どちらに行つていやら全く困つて終つた。そこへ丁度運よく一人の若者が來て、「五稜郭」はこつちだと道を教へて呉れた。あまり嬉しかつたのでその若い

男の名前を聞いた處、近くで牛を飼つてゐるものだと答へたのも面白い。吃度牛を飼つてゐると云ふのだろう。考へて見れば親切で氣持のよい男だつた。

漸く五稜郭へ辿り着き、開陽丸の機関長をしてゐた朝夷健次郎君に面會して使の趣を傳へることは出來たが、そのまゝ五稜郭から出ることが出來なくなつて遂に歸順迄居つた譯である。

其の後五稜郭の一同は方々の大名に預けられたのだが藤堂に預けられたものが一番馬鹿を見たやうになる。と云ふのは、開陽に乗り組んでゐた浦賀の與力の上席、中島三郎助と云ふ人が津軽陣屋を守つてゐた時に寄せ手の藤堂勢をひどい目に逢わせたので、その恨みがあつたからだと思ふ。中島氏はこゝで親子共戦死した。確かこの人は開陽の砲術長であつたと記憶してゐる。

そこで我々仲間は一時函館の寺院に入れられ毎日握り飯に梅干と澤庵で三週間暮した。それから御上より當地で引取り人があるなら渡してやると云ふことで、幸ひ私は親戚の者が大和船の船長をして當地にゐたので、これに依頼して引き取つてもらひ、しばらくして和船の水夫に化けて新潟に渡り、佐渡を經て山口縣の上の關へ行き、此處から國元へ船一隻雇ひ切りで行つたのであるが、其の代金が貳兩三分、今の貳圓七拾五錢である。

【解説】

〔五稜郭〕：五角形の平面をもつ洋式城塞の意。江戸幕府が元治元年（1864）北方警備の箱館奉行庁舎として建造した城郭。明治元年（1868）～2年（1869）幕臣榎本武揚らがここに拠って新政府軍に最後の抵抗を行った。

〔味噌・醤油〕：『仙台戊辰史』によれば、旧幕府艦隊は仙台発航時に艦隊用物資として味噌2百樽、醤油5百樽を調達していた。

〔インバネス〕：（スコットランド北部の地名から）ケープ付きの男子用袖無し外套。幕末から明治初年にかけて輸入され和装用コートとして流行した。とんぴ、二重回しとも呼ばれた。

〔朝夷健次郎〕：浦賀奉行与力、長崎海軍伝習所3期生（蒸気方）。榎本武揚とともに蝦夷地に脱走。戊辰の役終結後、新政府に出仕し横須賀海軍工廠に勤務した。なお、戊辰の役当時の開陽丸蒸気役一等（機関長）は小杉雅之進であった。

【原文】

國元に六ヶ月程滞在し明治二年五月に兵庫に出た。

運送船飛龍丸に一等運転手として乗り組み北海道諸港並に樺太等を航海して十二月品川着直ちに廻漕丸に乗り組み、伊勢四日市―横濱の定期航海をし、翌明治三年より四年一月迄大阪・神戸―横濱の定期航海をしてゐた。

神戸港を出帆して航海中船客の内海軍士官貳名、今井兼輔少佐と伊藤雋吉大尉と乗り會はしたことがある。其の時色々の話のときに幕府にゐた當時の話が出兩君も歸京の上は兵学寮へ行くから貴殿も行かぬか今兵学寮には幕府時代の人が大勢居ると云ふ話なので、品川へ入港して直ぐ下船し、明治四年二月「海軍兵学寮專業學舎」といふ辭令にて入り明治六年同寮練習船椎龍丸の雛型を作製したことにより、特別勉勵の意味を以て金一封を賜つた。

同年六月兵学寮並に乾行艦兼勤を申し付けられ、明治九年六月奥羽御巡幸還御の節、御召艦明治丸に一時乗り組みを命ぜられ、同年七月還御の後、慰勞として宮内省より酒饌料を賜はる。丁度此の時の長官は海軍中將伊東祐麿氏、船長某外国人であつた。明治丸は現在越中島東京高等商船學校の繫留練習船になつてゐる。

私は明治丸が横濱入港と同時に御用濟みに付、今度は乾行艦乗組を申し付けられ月俸四拾五圓を給せられ海軍水兵上長に任命された。

明治十一年五月には金剛艦乗組を命ぜられ、同年八月河村海軍郷及花房外務大書記官等も便乗せられて横濱港を出帆し途中岩手縣釜石港並に山田港に寄港して函館に入港した。同地で黒

田開拓長官が乗艦され、これより魯領浦鹽斯德へ渡航、九月四日函館に歸港し、同港に碇泊すること六日間、後小樽、室蘭港に寄りこれより青森に入港した。同地で陸軍少將東伏見宮殿下が御乘艦遊ばされ岩手県大槌港で附近を測量し歸路宮城縣東名港で御上陸あらせられ、十月七日横濱に歸港した。

【解説】

〔明治二年五月に兵庫〕：明治三年五月の誤り。

〔船長某外国人〕：R・H・ピータース。明治丸は明治8年（1875）初頭イギリスのグラスゴーを出港し日本に向かったが、その時の回航船長がピータースで、明治15年2月28日に退職するまで明治丸船長を勤めた。回航時のピータースの月額は310円、一等機関方（機関長）W・G・カロメンは285円であった。ちなみに、当時の警視庁巡査の月給は10円（一等巡査）～4円（四等巡査）であった。

〔乾行〕：木造内車（スクリュー）船、150馬力、3檣バーク、排水量523トン、原名「ストルク」。イギリスのリバプールで建造。元治元年（1864）鹿児島藩が長崎で購入。

〔金剛〕：鉄骨・木造装甲、レシプロ1軸スクリュー船、2,035馬力、ダブルトップスルスクーナ（咸臨丸同様の帆装）。1875年（明治8年）9月イギリス・ハルのアールス社で起工、1878年1月就役、同年4月横浜に回航し5月に日本海軍に編入、1909年（明治42年）7月除籍。

【原文】

明治十二年英国海軍艦長「リヤデット」氏所藏の運用書一部を献納したので海軍省より賞狀を賜はり、同年六月兵學校御雇の英国教師が滿期で歸國したので同校生徒教授の爲め乾行艦乘組兼兵學校運用課勤務を申し付けられ、直ちに運用課第三號生徒の教授を命ぜらる。明治十三年本務の餘暇を以て、芝新錢座町攻玉塾内の商船学校運用課甲號生徒を教授し又同塾に於て乾行艦五拾分の一の雛形を製造した。

同年八月兵學校運用課第二號生徒の教授を命ぜられた。此の時の生徒諸君の内に、加藤定吉、山下源太郎、名和又八郎の三氏は大將に出世せられ石橋甫、森義太郎の兩氏は中將、大城、荒川兩少將其他大佐數名あり。

つまり私は戰争に敗けてそれから暫くの間商船で方々を乘り廻し、明治四年一月に現在海軍軍醫學校になつてゐる築地の兵學寮に出て若い海軍士官の卵とも云ふべき人達に艦船の操縱法を自分の經驗で教へたのである。

其の頃は軍艦に詳しいものは先ず幕府の者達で、各藩でも多少心得のあるものはあるにはあつたが、佐賀藩位で他は大したものでなかつたと思ふ。

其處で私は專業學舍といふ辭令を貰つたが、要するに專ら實地の方を司るといふ意味なのである。その役をしたのは私一人であつた。

運用課長も實地（其の頃毎年海軍始の時は天皇陛下の御前で、前述の雛形椎龍丸で運用術實習を天覽に供した）のことになると大概私が相談に與つたものだつた。其の後英国から參拾四名の教師が來て教へてゐたもので、齋藤實大將のクラスはシップスネームより英人に習つた級であつた。

加藤定吉、山下源太郎、名和又八郎の三大將「クラス」は最初から日本人教官にのみ教授されたもので、此の人達を私が受け持つことになり、其の人數は貳拾七名であつたが、外に英人教師の息子で「ハムモンド」と申す少年が一名居り、この少年には實地を教へるに差支なかつたが名稱等は先方の方がお手のもので、これには全く閉口した。

明治十六年十月海軍兵學校卒業

海軍大將男爵　加藤定吉

昭和二年九月五日　薨

海軍少將　大城源三郎

昭和七年二月二十五日　卒

同　大尉　瀬之口覺四郎

明治二十七年九月十七日　戰死

同　大將男爵山下源太郎

昭和六年二月十八日　薨
○同　大佐　川合昌吾
同　大佐　矢代由徳
明治四十一年四月三十日　公死
同　大佐　宇數甲子郎
昭和二年十二月五日　卒
同　中將　仙頭武央
大正八年十二月十二日　卒
○同　中將　石橋　甫
同　中將　森　義太郎
昭和四年六月二十四日　卒
同　少將　廣瀬勝比古
大正九年十月二十日　卒
同少尉補　澤田友次郎
明治十八年五月十七日　死
同　少將　西山保吉
大正二年十月十九日卒
同　大尉　岡部鉚造
明治二十五年十一月廿日　公死
同　大佐　中川重光
昭和八年三月二十八日　卒
同　大尉　深川喜文
明治三十一年一月廿四日　公死
同　大將　名和又八郎
昭和三年一月十二日　薨
同　少將　奥宮　衛
昭和八年一月七日　卒

同　大佐　淺羽金三郎
明治三十七年九月十八日　戦死
同　中佐　山村彌四郎
明治三十七年六月十五日　戦死
同　少將　荒川規志
昭和九年十二月一日　卒
○同　大尉　中村健次郎
同　大尉　杉田秀一郎
明治二十六年二月三日　死
同　中佐　三戸與十郎
昭和六年八月十二日　卒
同　少尉　掘　秀房
明治二十三年一月九日　免官
同〃中佐　遠山政行
明治四十一年六月四日　卒
同少尉補　西田四郎次郎
明治十八年一月二十九日　死
○印現存者
外にエフ・ダブルユー・ハモンド英国
主計中佐は無事

【解説】

〔攻玉塾〕：文久3年（1863）近藤真琴によって芝新銭座（現港区浜松町1丁目）に創立された数学・オランダ語・航海術などを教授する蘭学塾で、海軍および商船と関連が深かった。「攻玉」とは詩経の「他山の石、以て玉を攻くべし」を引用したものである。現在の攻玉社。

【原文】

私は艦船運用のことを專ら教授したので、その頃は現代と異なって號令と云ひ、何から何まで英語を用ひたもので、私もこれには少なからず困らされたものだ。

最初生徒は各藩から抜擢されて出て來た連中で二十才前後の秀才揃ひ、然もはち切れるやうな元気横溢の人達ばかりであつたので私も大變愉快であつた。

山本權兵衛、日高壯之丞兩大將は第一期生で山本さんは何しろ其の頃から異彩を放つてゐた。大體鹿兒島の風は學生でも先輩でも分け隔てなく一緒になつたものであるが、山本さんは時の海軍卿（現代の海軍大臣）であつた川村純義參議（後、海軍大將）の處などへも、どんどん出張つて行くと云ふ幅利きで、なんでも川村海軍卿に直接談判して七名程「ドイツ」へ留學させることにして貰つたと云ふことを聞いた。

何しろ総理大臣を二度までやられたのであるが、一度引退すると、政治上には殆ん口を利かれないのには全く感心の至りである。

夫人も世人に傳へられる通りの立派な御婦人であるが、公の席には滅多に出られず、御子さん達を立派に教育されたのは全く我々の敬服す

べきことだと考へる。

私は四、五年前に銀座の某支那料理屋に昔私の受持つたクラスの生徒さん達に招待されて大いに懐舊談に花を咲かせたことがある。

その時出席されたのは加藤定吉、山下源太郎、名和又八郎の三大將、石橋甫、森義太郎兩中將、大城、荒川、西山少將、宇敷甲子郎大佐の諸氏であった。（現存同クラスでは石橋、川合氏外一名のみ御健在）私としては全く光榮の至りで昔を忘れられない各將等の厚誼に感激した次第であります。

【解説】

〔参議〕：明治2年（1869）太政官に設け、大政に参与した官職。明治4年以降は太政大臣・左右大臣の次で、正三位相当。明治18年（1885）廃止。

【原文】

話は前に戻つて私は海軍の任務を辭して

「明治十四年十月六日登録　甲種船長免状」

明治二十九年法律第六十八號船舶職員法ニ依リ之ヲ授與ス

明治三十一年二月二十二日逓信大臣男爵末松謙澄

右の免状を持ち直ちに日本橋區小網町三丁目に在る風帆船會社（社長海軍大佐遠武秀行）の回漕丸の船長となり、肥前唐津より海軍省の石炭を横須賀に運搬することに從事した。

此の航海は非常に難航海で、これには色々話したいこともあるが餘り長くなるので略することにする。後、同社の謙信丸に乗り組んだ。本船は三本「バークリッグ」船である。これで品川灣より函館に行き、此往復日數は二十一日間、積荷は大概昆布、鰊粕で運賃は參千貳百圓位で先づ上等であつた。次航は八月十日に品川を抜錨して青森縣の八ノ戸字鮫港に着し、同港で鰯粕を積み、往復運賃參千參百餘圓、此の日數廿八日間であつた。第三次航海は九月八日品川を出帆十六日に南部鍬ケ崎に寄港した。此航海中大きな鮫を釣り上げた。

此の鮫の長さ貳間、胴の丸さ三尺五寸もあり、航海中色々の料理をして、蒲鉾或は味噌漬などもつくつた。此の航海の日數は二十一日間、同二十六日函館を出帆、十月一日暴風雨のため房州館山に寄港、四日品川着、この復航は八日と十四時間、第四次航は品川・函館間で十月十七日に品川を出帆して二十一日房州館山に寄港し、二十三日同港を出帆、同三十日南部鍬ケ崎に寄港、十一月三日に同港を抜錨し、渡島の國「三尻岸内」灣に向つたが、ここは惠山崎の近傍で日々の強逆風の爲め止むを得ず使を函館支店へ出し、直ちに汽船福山丸に曳かれ同十時頃着、直ぐ積荷して十二月八日同港を出帆し、十八日に品川に到着した。第五次航は品川、仙台、折リ濱間で十二月二十一日品川灣を出帆、航海日數及び積荷日數共十一日間。

扨茲に一寸陳べて見たいのは舊三菱社が西南戦争時代から例の大隈さんなどの後援者のあつた關係で、海運方面の仕事を一人占めをしてゐたことがある。ところが長州のひとで品川彌次郎と云ふ方が内務大臣時代に半官半民の共同運輸會社と云ふものを創立して、英国へ山城・近江・薩摩・長門・播磨・河内等の新船を注文し、これが三菱會社と對抗することになつた。社長は薩摩の森岡と云ふ人がなつて盛んに活躍したものだ。

而してこの兩會社は競争して、よくあるところの共倒れとなり、後には兩會社が併合した。これが現在の郵船會社の始めである。

私も風帆船會社時代の株を數拾株持ち船員であると共に株主であつた譯だ。

【解説】

〔三本「バークリッグ」〕：3檣バーク帆装（帆船日本丸は4檣バーク）

〔長さ貳間、胴の丸さ三尺五寸〕：二間（約3・64メートル）三尺五寸（1・06メートル）

【原文】

それから私は僅か百三十餘噸の汽船嬌龍丸舊

名「ケプロン」で根室港（北海道東端）を起点にして上半ケ月間は擇捉・得撫「斜古丹島」、下半期は國後並に北見國網走迄に到る航路に從事したが、此の方面の航路は全く私が最初に開いたものだ。（共同運輸會社時代）

又それから後同社の玄武丸に乗組み北海道を航海中幌泉に昆布の積取りに行き碇泊中、北海道長官湯地氏の案内で内務大臣山縣有朋氏、外務大臣井上馨氏外官吏大勢、中には今も健在の三井物産の重役であった益田孝氏もまぢり、方々を廻つた。湯地氏は非常な剣幕で直ぐ釧路へ向け出帆せよと申されたが、私は承知せず、函館支店の命のなき時は斷然出帆出來ないと云つた。その譯は荷主との約束で積取に來て其の日で丁度一週間も風のなぎるのを待つてゐる次第なので翌日が好天気でも出帆せぬと堅く斷つたのだが湯地氏も色々と申し出たので、それならば荷主の苦情も引受け又私の身も引きうける約束で、直ぐ其の夜釧路へ向け出帆した。朝釧路へ着いて間もなく本船は出帆し幌泉で荷物を滿載して函館へ入港して、この趣を支店長に報告したことをきおくしてゐる。

其の後横濱と伊勢の四日市との定期航海をし、後前述の持株を他に讓り渡し、それにて長崎村と云ふ所で牧場を始めたがうまく行かず、遂に之を親戚の者に托して、中越汽船會社々長筏井順造氏の小菅丸に乗つて日本中を廻航し、二ケ年後これも止めて北海道函館汽船會社の支配人となつた。

此處にゐる内に明治二十六年の暮に友人五名と共に相談して汽船を買ひ求め之を五洋丸と名附けた。この船長には伊藤定弘氏を聘した。そして翌二十七年日清戦争が勃発して意外の利益を得た。

其の後馬山浦事件でゴタゴタしていた時、友人三名で拾五万五千圓の勝野丸と云ふ貳千貳百噸の汽船を買つた。此の仲間は谷道、佐野と云ふ人であつたが、名義が私になつてゐたので、先年の反動で大損をした。何しろ横濱・門司間の一圓の石炭運賃が五拾貳錢と云ふ大暴落をしたのだから堪らない。

私は共同運輸會社時代には主として北海道ばかり航海して居た。確か明治八年頃と思ふ榎本武揚氏が露京に全權公使に行つた時に千島と樺太とを交換する事になつて、「シムシリ」にゐた「ロシア人」五十人程は日本に歸化することになつたので、私は百三十噸ばかりの船でそれを受け取りに行き、根室に近い「斜古丹」島に移した事がある。その時彼等に米等を與へたが一向に食べない。何しろ彼等は「オツトセイ」とか「アザラシ」ばかり食べているので、やはり口に合はないと見える。

毎月いろいろの物を持つて行つてやり、牛などは時々持つて行つてやつたものだ。牛を陸揚げするには艀はなし止むを得ず海中に投込み泳ぎ上らせた。

【原文】

渡邊清次郎翁米壽祝賀會　発起人の一員

尾山生投稿

渡邊翁は明治の初年海軍水兵上長として兵學校にあり運用術の實地を教授せられたる、當時優秀の經驗者なり。現時に於ける我戰友中翁を知る極めて少なかるべきも、斯界の功勞者として永く記念すべき恩人なり。吾人同志は左掲案内狀に示すが如く五月二十日其の米壽祝賀會を催したり。

◎當日發起人代表者は左の如く傳言せり

前略　古來人生五十と稱するも、先ず六十一歳の本卦回以上を以て老人とする様です。翁は疾く二十七年前に此の齡を過ぎ、尚十八年前には古稀となり、今や正に米壽を迎へられたのであります。一般世間に老齡の人は鮮くはありませんが動もすれば病床に親しみ、然らざるも心神疲憊して退嬰に傾き活躍に耐へない人が多いのです。然るに翁が今尚壯者を凌ぐの鋭気あるは洵に欣ぶべく羨むべきではありませんか。此の勢を以て押せは百歳の壽を完ふせらるゝは決して難くはないこと、思ひます。希くは吾人は各々健康に注意を拂ひ翁に肖り百壽の賀宴に列

することを得たいものであります。

次に阪本男爵は來賓總代として翁の經歴を叙し最も周到懇篤なる祝辭を述べられた。最後に翁は謝辭を述べ様とせられたが歓喜の餘萬感胸に迫り、言辭を發する能わず親戚某をして代讀せしめられた。

其の末尾に左の數語あり

諸君の御厚意に酬ゆるため、私が今日迄實踐し來りたる健康保持の方法を披露し御參考に供します。即ち第一は毎朝早起、戸外散歩勵行、第二は成るべく物事に屈託せぬ事、第三は早寝の實行であります。

蓋し吾人後輩に長生の要旨を示唆せられたものであらう。兵學校に於て翁の教授を受けたるは明治六年よりの第三號と十二年よりの第七號と二級である。第三號の生存者は齋藤實、阪本俊篤、寺垣猪三、岩崎達人の四氏第七號の生存者は石橋甫、荒川規志、川合昌吾、中村健次郎の四氏と思ふ。當日齋藤子爵は公務に妨げられ參回されなかったが數日前翁の米壽を恭祝するとて特に左記の揮毫を贈られた。

若蘭之秀　赤松之茂

其壽何高　其澤何長

翁は無上の光榮として深く其厚情に感激し之を模寫して臨席者一同に頒布せられた。

因みに翁は嗣子を得られず、令甥海軍大佐渡邊眞吾氏を養嗣子とされたが數年前其の長逝に逢われたことは寔に同情に堪へない次第である。

【解説】

〔若蘭之秀　赤松之茂　其壽何高　其澤何長〕：「若い蘭のように（香は）秀れ、赤松のように（青々と）茂っている。その壽の（山は）なんと高く、その沢（谷間）のなんと長いことよ。」渡邊清次郎の人生を齋藤子爵が漢詩としたもの。

〔海軍大佐渡邊眞吾〕：日清戦争（明治27～28年、1894～1895）の黄海海戦で勇名を馳せた。

（終り）

【原文】

不肖清次郎世ヲ憚ルコト玆ニ八十有八年顧ミテ何等疚シキコトナカリシヲ誓フト共ニ又何等報ズルコトナカリシコトヲ恥ズ。然ルニ此ノ企テアリ死ヲ以テ謝スルモ尚足ラザルヲ憶フ。今ヤ時局ハ重大、邦家非常時ニ會ス。何等盡スベキ力モナク施スベキ策モナク徒ラニ殘骸ヲ曝シテ知友ニ辱ヲ致スノミ頗ル慚愧ニ堪ヘズ。玆ニ今回ノ此ノ機ヲ最后トシテ永久ニ諸公ニ別レ生ケル屍トシテ余生ヲ送ラムトス。希クハ老生ノ微衷ヲ酌ミ御許容アラムコトヲ。

昭和九年三月

渡邊清次郎

【渡邊清次郎】

清次郎は弘化4年（1847）11月25日、塩飽諸島・本島・泊浦で生まれた。

安政7年正月13日（1860年2月4日）咸臨丸は、日米修好通商条約批准書交換のためアメリカ首都ワシントンに向かう遣米使節を乗せた軍艦ポーハタンの随伴艦として、北米サンフランシスコに向けて品川沖を出航した。同年3月3日、大老・井伊直弼は桜田門外で暗殺され、同3月18日「万延」と改元された。

咸臨丸は5月6日（1960年6月24日）品川沖に帰航した。

この5月、14歳の清次郎は本島・泊浦の人たちと水杯を交わし、幕府軍艦蟠龍丸に乗艦のため勇躍江戸に向かった。

『渡邊清次郎回想録』は昭和10年、清次郎89歳のときに語ったものをまとめ、昭和12年10月に非売品として刊行したものである。

清次郎の従兄にあたる石川政太郎は、咸臨丸に帆仕立役として乗船し『安政七申歳正月十三日日記』を手記した。その内容は咸臨丸の往航について航海日誌風に記したもので、水夫の書いた唯一のものとして、その意義が認められているものである。政太郎は書も読め、御家流の字も能くしたので『日記』はやや読み難く、さらに方位、帆の名稱などはオランダ語の発音のままをカタカナで記しているので難解な部分が

渡邊清次郎の甲種船長免状（渡邊清次郎回想録）

渡邊清次郎（渡邊清次郎回想録）

多い。

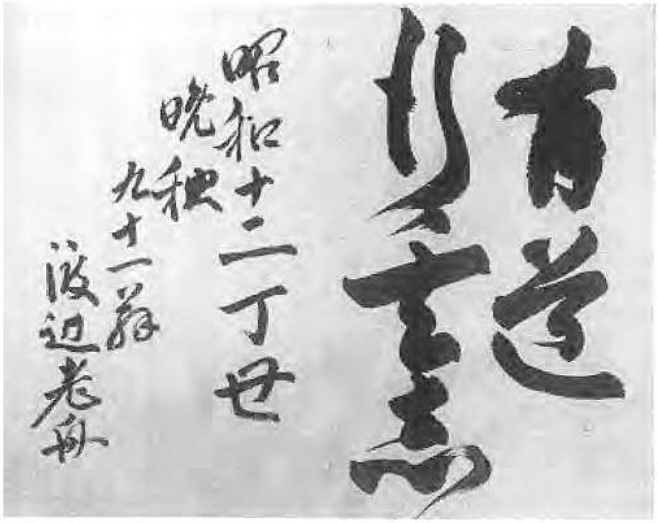
『渡邊清次郎回想録』は、昭和10年頃の言葉遣いであるから、文章は平易で理解しやすい。その内容は、清次郎が関与したいろいろな事件―千秋丸による小笠原島航海。オランダより回航の軍艦開陽丸の受け取りのため築地の海軍操練所に入所し訓練を受けたこと。江戸薩摩屋敷放火事件。開陽丸と薩摩藩軍艦春日が砲火を交えた阿波沖海戦前夜の春日に対する偵察行。15代将軍徳川慶喜公の大坂城脱出と江戸回航の状況。上野彰義隊の悲惨な状況。旧幕府艦隊の江戸湾脱出と遭難、開陽丸の舵折損と応急仮舵。開陽丸の江差沖における破船沈没。室蘭の澤開拓奉行の命により箱館・五稜郭への隠密行。五稜郭陥落・戊辰の役の終結などなど―の裏話が多く、一般にはあまり知られていない話題を提供しているところに特徴がある。

明治2年5月一等運転士として商船に乗ったが、航海中に知り合った今井・伊藤の2海軍士官の推挙により明治4年「海軍兵學寮専業学舎」に任用された。明治9年（1876）には明治天皇の奥州・函館御巡幸の御召艦明治丸の乗り組みを命じられた。下船後、軍艦金剛や乾行に乗艦した。この年、海軍兵學寮は海軍兵学校と改称された。

清次郎は明治14年（1881）に、11か年にわたる海軍兵学校の職を辞した。この間に彼の薫陶を受けた生徒のうちには、のちの海軍大将山本権兵衛、同日高壮之丞、同加藤友三郎、海軍中将石橋甫、同森義太郎、海軍少将大城源三郎など錚々たる人材が多数おり、郷土史家の真木信夫は渡邊清次郎を「日本海軍育ての親」と評価している。

【おわりに】

平成24年7月3日から同月31日まで、東京海洋大学明治丸ミュージアム（越中島キャンパス）で大学が所蔵する貴重な文化財・資料から選出して、企画展示「蔵出しお宝展」が開催された。その中に渡邊清次郎の昭和12年11月揮毫の墨書



渡邊清次郎の書

が展示されていた。その説明文には「日本最古の船長の一人、幕府軍艦開陽丸、明治丸等に乗船」とある。

有道
行其志
昭和十二丁丑
晩秋
九十一翁
渡辺老舟

書は「道あり、其の志を行う」と読む。

この書は、清次郎が想い出の明治丸を東京高等商船学校に訪問したおりの墨書であり、彼は翌昭和13年4月18日東京で92歳の生涯を終えているから、渡邊清次郎の絶筆と思われる。

—完—

【参考文献】

ロマンの海に漕ぎだそう：橋本進、舵社、1990

物語・瀬戸内航海記（旅客船No.202）：橋本進、（社）日本旅客船協会、1998

武士の家計簿：磯田道史、新潮社、2003

日本の貨幣の歴史：滝沢武雄、吉川弘文館、1996

咸臨丸還る：橋本進、中央公論新社、2001

咸臨丸、大海をゆく：海文堂、2010

幕末軍艦咸臨丸（上・下）：文倉平次郎、中央公論社、1993

榎本武揚：加茂儀一、中央公論社、1988

長崎海軍伝習所：藤井哲博、中央公論社、1991

日本近世造船史（明治時代）：造船協会、1911

航こう—榎本武揚と軍艦開陽丸の生涯—：綱淵謙錠、新潮社、1986

【お詫びと訂正】

「『渡邊清次郎回想録』について（前編）」（No.260）に誤りがありました。お詫びして訂正をお願いします。

①27ページ、2段目
〔拾四歳の5月〕：文久元年（1861）5月のこと。14歳になった渡邊清次郎は幕府軍艦に乗艦のため江戸に向かった。

②30ページ2段目6行12字目、11月を10月に。